

学習内容報告書

学校名	長崎県立猶興館高等学校
授業者	北川丈晴・堀川智史・新里哲史・江口真矩・植野雅貴・近藤史景・田島浩子・村田誠一郎

1. 単元計画

1-1. 単元名

ふるさと探究活動

1-2. 学年

2 学年（普通科）

1-3. 教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

総合的な探究の時間

1-4. 単元の概要

【テーマの設定】

1 年次の 3 学期に平戸市役所の企画財政課、文化交流課、長寿介護課から 3 名の講師を招聘し、地域が抱える諸問題についての講話を受けた。その後、「各種産業」「福祉」「歴史・文化」「地域行政」などの分野に分かれて討議を行いテーマの設定を行った。その後テーマごとに 1 4 の班に分かれた。

【調査・研究】

テーマ班ごとに分かれて調査・研究を行った。調査ではインターネットだけに頼ることなく、市立図書館で過去の市報を閲覧したり、歴史資料館で実物の資料を見せてもらったりするなどした。また、全校生徒や行政機関、企業などにインタビューやアンケートも実施した。

【中間発表】

テーマ班ごとに調査の途中経過や今後の活動方針などを発表した。質疑応答を行い、修正点や内容的に不足している部分について生徒間でアドバイスを行った。（令和 3 年 8 月 3 1 日実施）

【成果物の作成】

各テーマの調査研究を踏まえて地域の課題を解決するための方法を作成し、地域にフィードバックできる成果物の作成を行った。

【最終発表】

8 月の中間発表以降の活動を含めた 1 年間の活動の総まとめを行った。各テーマとも地域にフィードバックできる成果物を合わせて発表した。（令和 4 年 1 月 2 5 日実施）

1-5. 単元設定の理由・ねらい

本校の生徒の多くは卒業後に進学するため、地域外（県外）へ転出する者がほとんどである。このことは地域の持続的な発展という観点では明らかにマイナス要因であり、少子高齢化や人口減少の主原因の 1 つとなっている。そこで本単元では、将来生徒たちが地域の発展に貢献できる素地を作るために、地域について「知る」ことを主題とした。「知る」プロセスでは、従来の講話などのような受動的なスタイルではなく、地域の課題を調べる中で生徒自身がこれまで気づけなかった魅力に気付くという能動的なスタイルをとった。そのため、テーマ設定から調査先・調査方法の選択、さらに地域へフィードバックする成果物の作成についても極力生徒主導で行い、授業者は対外機関とのコーディネートやアドバイザーとしての役割を専らとした。

それらの活動を通して、テーマ班内での協働や先導する生徒のリーダーシップの醸成と、自主的に動くことで本校の校是である「自立・自発」の精神を育成することをねらいとした。

1-6. 育みたい資質や能力、態度

<ul style="list-style-type: none"> ・情報収集能力、情報分析力。 ・グループ内の協働性とリーダーシップ。 ・これまで見えていなかった問題点や地域が持つ魅力を発見する。 ・地域の問題について考えることで、地域行政についての興味関心を持たせ、将来の有権者としての意識を育てる。

1-7. 単元の展開（全32時間）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
	<p>（1年次の事前の学習活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講話（1/21実施） ・各種産業「福祉」「歴史・文化」「地域行政」などの分野に分かれて討議を行いテーマの設定を行う。 ・テーマ班ごとに調査・研究方法についてミーティングを行い、共通理解をはかる。 	<p>講師）平戸市役所の企画財政課、文化交流課、長寿介護課から招聘</p>
3	<p>研究テーマ設定報告会への準備</p> <p>テーマ班ごとに調査・研究方法や最終目標についてポスターにまとめ、報告会への準備を行う。</p>	<p>発表練習で、誰にでもわかりやすくプレゼンテーションすることの重要性を理解させる。</p>
2	<p>研究テーマ報告会</p> <p>作成したポスターを使って班ごとに発表を行い、生徒や教員から質問やアドバイスを受ける。</p>	<p>他班のテーマにも興味関心を持って質疑応答に臨む姿勢を指導する。</p>
1	<p>報告会の振り返り</p> <p>報告会での質疑応答やアドバイスを踏まえて調査・研究活動の内容の修正などを行う。</p>	
8	<p>調査・研究①</p> <p>テーマ班ごとに調査対象へインタビューやアンケートを実施し、課題についての理解を深める。</p> <p>インタビューやアンケート後には、その内容のまとめや分析・考察を行い、さらに疑問点を調査する。</p>	<p><u>調査・研究での外部の協力先</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・平戸市役所 （企画財政課・観光課・こども未来課・長寿介護課） ・平戸市社会福祉協議会 ・平戸市観光協会 ・平戸市未来創造館（図書館） ・NGO しあわせの木（子育て支援団体） ・松浦史料博物館 ・平戸市生月町博物館 島の館 ・宿泊施設 湯快リゾートホテル蘭風、平戸海上ホテル、サムソンホテル、ホテル彩陽 WAKIGAWA、国際観光ホテル旗松亭 ・まつうら党交流公社（グリーンツーリズム支援） ・県北家畜保健所 ・平戸森林組合椎茸生産部 ・長崎県立北松農業高等学校 ・蔦屋（和菓子店） ・瀬戸市場（水産物小売り） ・一山水産（水産物卸）

3	中間発表会への準備 テーマ班ごとにここまで調査した内容や結果をまとめ、発表のためのプレゼンテーションを作成する。報告し、地元の課題を解決するために今後どのようなことに取り組んでいくかを発表した。	生徒間で質問やアドバイスなどを行い探究内容の深化を行う。
2	中間発表 作成したプレゼンテーションを使って班ごとに発表を行う。	報告会では記入シートを全員に配布し、各発表に対しての「良かった点」と「改善点」を記入させた。発表後回収し、班ごとに配布する。
1	報告会の振り返り 報告会で調査・研究活動で評価されている点や、不足している点を確認する。	記入シートを班ごとに活用する。
1	講演 『なぜ、猶興生が地域課題に取り組むのか』 ～猶興館高校の取り組みを校外の視点で語る～	講師) 中島 洋先生 (元長崎県立大学特任教授)
8	調査・研究② 中間発表と中島先生の講演をふまえて調査を継続した。また、地域にフィードバックできる成果物の作成を進める。	<u>調査・研究での外部の協力先</u> 調査・研究①とおなじ
2	最終報告会 テーマ班ごとに1年間取り組んできた地域の課題を解決・改善するための方法や成果物を発表する。	
1	振り返り ふり返しシートを記入させる。	1年間の活動に対する自己評価をする。

2. 学習活動の実際

行政機関や一般企業へのインタビューやアンケートなどの活動

2-1. 単元における位置づけ

単元 32 時間中の 7～15 時間目

2-2. 本時の目標

・行政機関や一般企業へのインタビューやアンケートなどの活動に主体的に取り組む。

2-3. 本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点 (方法)
<p>① <u>調査先の選考と質問内容の抽出</u> 行政機関や一般企業へ質問する疑問点や知らない点について、まとめる作業を行った。 質問内容をインタビューやアンケートをするために言語化する過程で、自分たちの探究テーマに対する理解が漠然としたものだったと認識した。他人に質問したり説明したりするためには事前の段階でもっと深く理解しておく必要があると感じることができた。</p>	<p>生徒が作成したインタビューやアンケート内容について、設問を設定した理由や、こちらの設問の意図を相手に正しく理解してもらえるかなどを確認した。 郵送によるアンケートの場合は依頼文の作成についても指導を行った。 自分の考えだけではなく、他の班員の意見も尊重できたか。</p>
<p>② <u>調査先へのインタビュー</u> 事前に準備した質問内容のインタビューを実施。 どのインタビュー先も大変協力的で、緊張していた生徒たちも落ち着いて活動できた。高校生が地域を深く知ろうとする活動に対して地域の人たちが大変好意的であることや、地元の高校生だからこそ話してもらえることが多かったことに純粋に喜んでいった。</p>	<p>仕事中にインタビューに対応してくれたり、事前に説明用の資料を作成してくれたりしたことが当たり前でないことを説明し、生徒自身が相手への感謝の気持ちを持てるようにする。 準備したインタビュー内容だけではなく、相手の応答から質問内容を広げることも大切であることを事前に指導する。</p>
<p>③ <u>インタビューやアンケートのまとめ</u> インタビューでの回答やアンケート結果をまとめて考察を行う。 アンケート先へのお礼状の作成をする。</p>	<p>まとめの活動の過程で、次の活動につながる新たな疑問点を見つけさせる。</p>

3. 今回の活動の自己評価

新型コロナまん延防止のため、当初の計画通り実施することが難しい場面があった。大学講師（長崎大学水産学部）の招聘などを実施することができなかった。また、インタビュー先の制限（県外や医療機関など）や、インタビューの延期などがあったため、全体的な活動進行が1か月以上遅れてしまい、最終発表後の報告書の作成を行うことができなかった。

しかし、地域の課題を調べる中で生徒自身がこれまで気づけなかった魅力を発見するという当初の目的は、ほぼ達成することができた。生徒自身が主体的に地域の課題に向き合う中で、地域の行政や産業に携わる人たちから話を聞いたり、実際に体験させてもらったりして、自分たちが17年間過ごしてきた地域をより身近に感じることができるようになった。

また、活動の中で自分たちから様々なアイデアを出し、それを地域にフィードバックするための積極的な活動をすることができた。「キャラクターを創る」班は、作成したキャラクターを平戸城のマスコットキャラクターとして採用してもらえるように市役所に対して活動を行った。残念ながら平戸城では採用されなかったが、平戸市観光協会のポスター（図1）に採用された。「小さな島の魅力」班は生月島の観光パンフレット（図2）を作成して市の観光課などへ提案したり、「郷土料理について考える「平戸の宝」班や「平戸の漁業発展に貢献したい!!」班、「甘酸っぱいってどんな味だっけ」班、「歩いて見つかる平戸フーズ」班では地元の食材やお菓子を使った創作料理（図3）を提案したりした。それ以外の班でもPR動画を作成するなど、活動の中で班のメンバーの得意分野を活かした協働を実践することができた。

地域の方々が積極的かつ好意的に対応していただいたり、自分たちの考えた地域活性化のためのアイデアが実際に形となって採用されたりする中で、自分も何か地元貢献ができないかと考えることができるようになったことや、アンケートで70%近くが地元で働くことに対して肯定的に回答をしていたことも今回の活動を通しての成果と言える。



図1



図2



図3 ※夏香は平戸特産の柑橘類

4. 今後の課題

活動での今後の課題としては、調査・研究の多くが地域内で完結してしてしまったことである。近隣の別の自治体との比較や、自分の住んでいる地域が都市部に住む人からどのように認知されているのかなど、客観的な視点から地域の課題を見つめなおすことが必要だと考える。また、同じような活動をしている学校どうしで、リモートを活用して情報の交換をしたり、相互に発表をしあったりするなどの機会を設定できればよかった。

評価についての今後の課題としては、学校外の方の視点から評価される機会を持たせることが必要だと感じた。、新型コロナまん延防止のために外部から招聘することが難しい面もあったが、異なる視点からの多様な評価を受けることは、生徒自身の世界を広げることにも繋がると考える。

生徒にとっての今後の課題は、ふるさと探究活動を通して得ることができた体験や知見を、進路だけではなく、今後の人生に活用できるかである。web上の情報のみに頼って一人よがりな判断をすることなく、地域に眠っている有形・無形の資源や人とのネットワークを生かすことを大切にさせたい。

指導者側としての今後の課題は、生徒の発想力や行動力を喚起するような働きかけを指導の中でおこなえるようにならないといけない。そのためには、指導者自身が地域についてもっと勉強する必要がある。そのためにも、普段から地域へ足を運んで、地域の人たちとのネットワークを作っていかなければならないと感じた。

5. 本学習内容報告書活用にあたっての留意点

特になし。